

## 解釈の方法について——ボードレール受容史の再構成

佐々木稔

### 序論

作家を同時代の状況に置き直して解釈すること。文学研究において、こうした方法自体はある意味で自明なものであり、もはや研究上の必要条件に属するものである。しかし、そもそも「同時代の状況に置き直す」とはどういうことなのだろうか。これには様々な方向が考えられるが、本稿では、以下のようなハンス・ロベール・ヤウスの理論に従い、ボードレールを時代状況に即して解釈する解釈学的実践の試みの一つとして提示する。

L'herméneutique littéraire connaît ce rapport entre la question et la réponse, de par sa pratique de l'interprétation, lorsqu'il s'agit de comprendre un texte du passé dans son altérité, c'est-à-dire : retrouver la question à laquelle il fournit une réponse à l'origine et, partant de là, reconstruire l'horizon des questions et des attentes vécu à l'époque où l'œuvre intervenait auprès de ses premiers destinataires.<sup>1</sup>

過去のテキストを、そのテキストに対する他者において理解することが第一義となると、文学的解釈学は、解釈の実践に従って、問いと答えの関係を知る。他者において理解するとは、すなわち、テキストが原義に立ち返って答えを与えてくれるような問題を再発見すること、また、そこから出発して、作品が最初の受け手となる人たちのすぐ近くで生じた、そのような時代において生きられていた、問いと期待の地平を再構成することである。

テキストをその受け手との関係において解釈し直すこと。これが H. R. ヤウスのいう解釈学的実践の端緒となる思考である。1967年のコンスタンツ大学就任講演、「挑発としての文学史」<sup>2</sup>において、解釈学的な立場を鮮明に示したヤウスの態度表明そのものにも、「挑発」という語が示すように、立ち向かうべき理論的な前史があった。その前史を簡潔に素描すれば以下ようになる。ヤウスがその「挑発」を行った際、文学解釈学によって乗り越えるべき二つの文学理論があった。すなわち、フォルマリズムとマルクス主義文学理論である。この両派の論争は、主に言語の機能と、歴史という軸をめぐって争われた。ヤウスの理路に従って、概括的に述べるならば、文学作品は、それが発生した社会構造を必然的に反映するものであり、文学に固有の歴史はあり

<sup>1</sup> Hans Robert Jauss, *Pour une herméneutique littéraire*, Suhrkamp am Main, 1982, traduit de l'allemand par Maurice Jacob, Gallimard, 1988, p. 24-25.

<sup>2</sup> H. R. ヤウス『挑発としての文学史』、岩波モダンクラシックス、嚮田収訳、1999.

得ないとするマルクス主義の理論があり、それに対して、言語学の成果をふんだんに利用しつつ、文学を脱歴史化し、専ら詩的言語の機能によって文学作品を分析するフォルマリズムの理論があった。一方で、マルクス主義の理論は、作品を歴史や社会の中に位置づけることを可能にするが、作品の持つ意味作用を社会的な要因に還元してしまうという問題を孕んでいた。他方、フォルマリズムの理論は作品分析について、それ独自の研究領野を確保するものであるが、詩的機能に傾注するあまり、作品が歴史において持つ作用を捨象してしまう。ヤウスの解釈学的な企図は、こうした歴史的思考と非歴史的思考の間に橋を架けることにあった。この二つの思想を結ぶ蝶番となる鍵概念こそ、冒頭の引用文にも現れる「受け手」*destinataire* であった。ヤウスによるこのような反省を踏まえるならば、特定のテキストを解釈の対象と定めるとき、この受け手というものをどのように捉えるかが重要なものとなることは疑いが無い。

### 1. 受け手をめぐる困難

ヤウスの言う「最初の受け手」*premiers destinataires* が、作品と同時代の受け手を指し示すことは言うまでもない。ところが、この最初の受け手を受容史再構成の出発点に据えたとき、解釈者は具体的な実践のレベルで、ある困難に出会うことを余儀なくされる。

たとえば、『悪の華』の場合、その最初の受け手として、ボードレールを起訴した検事ピナールや、その弁護に回ったバルベール・ドールヴィイ、フロベール、あるいは何らかの反応や証言を残したユゴー、サント・ブーヴといった文学者たちがまず挙げられる。それに加えて、フィガロ紙などでボードレールを攻撃したギュスターヴ・ブールダンを始めとした、署名匿名による大小の記事などが、詩集の受け手として想定される<sup>3</sup>。このように、詩集に限って言えば、その受容史を再構成することについて、理論的にはそれほど困難はない。ところが、これはあくまでも詩集の受け手であって、個々の詩篇となると些か話が入り組んでくる。

エルネスト・プラロンヤル・ヴァヴァスール、あるいはシャンフルーリといった、詩人の古い友人たちの証言によれば、『悪の華』に収められた詩篇の多くを、既に 1840 年代には知っていたとのことである。とすると、そうした詩篇の例として挙げられている「地獄のドン・ジュアン」、「猫たち」、「アホウドリ」といったものについては、最初の受け手はこのように詩人にごく親しい友人たちだったということになる。つまり、『悪の華』が初めて刊行された 1857 年より 10 年ほども遡ることになり、詩集を分析の対象とするとときと比べて、受け手となる人びとの性質もかなり異なったものになることは容易に推測される。

このように、個々の詩篇について、その最初の受け手とは誰かと問いかけたとき、一つの問題が露呈されてくる。それは、受け手を想定する作業自体にまつわる曖昧さの問題である。詩がいつ書かれ、どのような人々がその最初の受け手であったかということは、推測はできても特定はできない。それならば、最初の受け手という概念を放棄して、詩作品それ自体を対象とした文学

<sup>3</sup> このあたりの事情については、プレイヤッド版ボードレール全集の裁判経過の資料、「Le Procès」de « Dossier des *Fleurs du mal* » dans *Œuvres complètes* de Baudelaire texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, Édition Gallimard, 1975, p. 1176-122. および、これについてさらに綿密に追究した横張誠『侵犯と手袋』朝日出版社、1983 が詳しい。

的・美学的分析のほうがまだしも説得力を持つであろう。これは理論的に見て明らかな後退である。そもそも、ガダマーやヤウスの言う文学的解釈学は、そのような方法論に対する批判意識から出て来たものであったにもかかわらず、である。ヤウスによる受容史の再構成という考えは、このように具体的な作品を対象としたとき、直ちにその鍵概念となる受け手をめぐる困難に逢着する。

詩集を研究の対象とすると、J. クレペや C. ピショワ、さらには阿部良雄などの仕事のおかげで、これまで為されてきた最初の受け手となる人々を推定することはそれほど困難なことではない。だが、このとき肝心の詩の意味は大きな枠組みの中で漠然と捉えられるほかはなくなる。ボードレール研究者がしばしば『悪の華』に対して「秘かな建築構造」を想定し、そこから個別の詩篇に込められた意図を演繹しなければならなかった理由も、こうした困難に由来するものだと考えられるのである<sup>4</sup>。

だが、個々の詩篇を対象とした場合、現代の解釈者が作品の意味に対して直接的に関わることが可能になるものの、受容史的な考察の出発点となるべき、最初の受け手を推定することがきわめて困難になる。マルクス主義やフォルマリズムの家たちが逢着した問題、すなわち作品の固有性と歴史との断絶という問題に、解釈学者もまた立ち止まらざるを得なくなる。ならば、歴史的思考と非歴史的思考の間の橋渡しという問題は、ボードレール研究という実践の領野において不可能なものとなるのであろうか。

『悪の華』の成立過程を見直してみると、そこに収められた詩篇のうち、ある程度の数が詩集の出版以前に既に姿を現していたという事実に目が留まる。これは、『悪の華』の成立事情と性格に深く関わることであるが、この詩集は、それ以前に既に書かれ、断片的に発表されてきた諸篇によって構成されている。しかも、『悪の華』以前には『レズビアン』と『冥府』という二つの詩集の構想もあった。このように、ボードレールの文学活動の跡を辿り直してみると、個別の作品として出版されたものを別として、新聞や雑誌という媒体がその活動の土台として働き続けていたという問題系が見えてくる。新聞や雑誌は、その規模や社会的な位置づけに応じて、それぞれの受け手と読み方を要請する。言い換えれば、掲載媒体というものが、作品が出現した瞬間において、書き手と受け手を媒介する役割を果たしているのである。つまり、媒介項としてのジャーナリズム。作家とジャーナリズムとの関わりの跡をたどることによって、そこに掲載された作品を、ひいてはボードレールを同時代の受け手によって構成される公共圏の中に置き直すことが可能になる。これは、解釈学的な実践の隘路を開くものではないだろうか。

そこで、解釈学的な実践の端緒として、ジャーナリズム界におけるボードレールの活動を跡づけ、それによって同時代におけるボードレール受容史の再構成を試みる。しかし、1841年から1868年に渉るその活動の全範囲を取り扱うことはもちろんここではできない。そこで、筆者の現在の主要な研究領域である1848年から1851年までの4年間に範囲を限定する。ボードレール

<sup>4</sup> 「詩人自身も「弁護士のための覚え書き」の中で「私の本の完璧な統一性」と呼び、バルベが「秘かな建築構造」と名付けて強調した詩集全体の一貫性については、従来この主張を真に受ける立場が有力だったが、むしろこれは裁判用の常套句と見る方が正しいようだ。ピショワもそうした統一性を詩集に認めようとするのは的外れであると見ている。」横張誠、前掲書、p. 243.

詩学の発展という観点からすると、これは次のような時期であった。1848年の2月革命をきっかけとして、ボードレールは政治的な言説と深く関わりを持つようになる。その後、政治的な意識を保持しつつも、民衆神話から脱却し、文学の場へと回帰する。そうした紆余曲折の只中で、『悪の華』に先立つ詩集『冥府』が企てられた。この時期に現れる主要な作品を、テキストを中心とした言説の場に置き直して解釈を行う。ここで言う言説の場とは、テキストの発表媒体、読者の可読可能性<sup>アンテリジビリティ</sup>、そして書き手の問題意識によって規定される。

## 2. 1848年

この年のボードレールは騒々しい。2月革命の際、ボードレールは文学仲間のシャンフルーリ、二人と親しかった画家クールベの同郷人トゥーバンと共に共和主義的新聞『公共福祉』<sup>サリュ・ポブリック</sup>を発行する。「共和国万歳！」*« VIVE LA RÉPUBLIQUE ! »*の見出しで始まるこの新聞は、資金不足のために二号しか続かなかつたが、いくつかの点で興味深いものである。署名が無いので、どの項目を誰が執筆したか厳密には分らないが、既に幾度か指摘されているように<sup>5</sup>、第一号の中の「民衆の美」と題された記事にはボードレールらしい文体と主張が現れており、独創性は皆無であると断じるのは些か軽率であり、1848年の革命時点のボードレール像に迫るためにも、この新聞をさらに詳細に分析する意義はあるように思われる。とはいえ、この新聞を通覧するならば、繰り返される「共和国万歳！」の表現や、第二号の冒頭を飾ったクールベの挿絵——そこには「民衆の声は神の声」*« VOIX DU PEUPLE, VOIX DE DIEU »*という民衆神話の常套句が読まれる——が示すように、共和国と民衆の賛美に彩られ、冷静な筆致よりも興奮のそれと言った方がこれを読んだ印象によく当てはまる。ボードレールらは街頭に立ってこれを売り歩いた。つまり、この新聞はその内容からしても、売り方からしても、民衆に直接訴えかけることを意図したものであったと判断してよい。

同時代の証言には、ボードレールの文筆仲間であったジャン・ヴァロンの『2月革命から12月の末までにパリで刊行された新聞の批判的総覧』がある。ヘーゲル哲学についての著作も持つヴァロンは、「民主主義的綺想<sup>ファンタジー</sup>の新聞」としてこれを評価している。我々の観察とヴァロンの評価から鑑みて、ここには政治的な意味で独創的なものはほとんどなく、内容、発行部数、知名度等、あらゆる点で、当時大量に発行された同様の主張を持つ他の群小新聞のうちの一つに過ぎなかった。

4月から6月にかけて共和派の新聞『国民論壇』の「編集秘書」という肩書きで携わる。続いて、6月暴動の際にはジャーナリズム的な活動は行っていないが、暴徒化する群衆の中に身を投じ、極度の興奮状態を見せていた。彼を取り鎮めるのに手を焼いたという友人の証言が伝わっている。10月には友人のつてにより、シャトールーで『アンドル県の代表者』の編集長を務めたという話が伝わっている。11月には、『酒屋のこだま』紙に詩集『冥府』の刊行予告が初めて出る。次いで、12月には同新聞に「殺人者の葡萄酒」が掲載されたと伝えられている。ただし、

<sup>5</sup> 阿部良雄『シャルル・ボードレール』、河出書房新社、1995。および海老根龍介「革命と悪——ボードレールの1848年」(『仏語仏文学研究』第32号、2006)。

当該号は未発見で、これについての詳細は何もわからない。

1848年における、ジャーナリズムを中心としたボードレールの活動は以上のようなものであるが、『公共福祉』と同様、『国民論壇』と『アンドル県の代表者』についても、どの記事がボードレールの手になるものであるかについて、統一的な見解は出ていない。しかも、『国民論壇』については Baudelaire という名が見えるのみで、これが我々の詩人 Ch. ボードレールであるかも判然としないのである。だが、この時期のボードレールの付和雷同というか、社会状況に些か迎合的な様子と、それでも漠然とした共和的、社会主義的な問題意識という点では一貫性が見られるのも確かである。さらに、詩集の刊行予告と、一篇の詩を掲載したらしい『酒屋のこだま』についてであるが、これは「飲料中央委員会」le comité central des boissons の機関紙として 1848年 10月 18日に創刊された新聞である。民衆詩人ピエール・デュポンの<sup>シヤンソン</sup>歌謡の欄が設けられており、社会主義的な色彩のかなり強い新聞だったようだ。デュポンやボードレールがこの新聞にどれだけ強い関わりを持っていたかはわからないが、『冥府』の名が初めて見られることは特筆すべきことである。この新聞の反秩序的かつ社会主義的な性格、さらには詩集の刊行予定日が 1849年 2月 24日、すなわち共和政成立の一周年記念日となっていたことなどから、『冥府』はその出現に際して、民主主義的かつ社会主義的な性格がかなり強調されていたと言える。つまり、この時期のボードレールは民衆神話の信奉者だったと言えるのである。この時期、ボードレールがブルードンに心酔していたという事実はこのことを裏書きする。ボードレールは、ブルードンには是非会いたいと希望する旨の手紙を送って、実際に会いもしたし、1848年に書かれたと推定される手稿には、ブルードンの『経済的諸矛盾の体系』からの抜粋が見られもする。次のようなジャン・ヴァロンの『冥府』評価はしばしば引用されるものである。

« Ce[= *Les Limbes*] sont sans doute des vers socialistes, et par conséquent de mauvais vers. Encore un, devenu disciple de Proudhon par *trop ou trop peu* d'ignorance !... Tous, depuis quelques mois, semblent avoir perdu la tête, ne plus croire à la littérature et se jeter dans le socialisme, sans voir que le socialisme est la négation absolue de l'art. »<sup>6</sup>

これ (= 『冥府』) はおそらく社会主義的な詩集であり、したがってまずい詩集である。また一人、ブルードンの弟子となってしまったのだ、あまりの無知かあまりにも無知でなかったがゆえに！……数か月前から、誰もかれもが正気を失い、もはや文学など信じなくなって、社会主義に身を投じている。社会主義が芸術の絶対的な否定であることもわからずに。

これ以降、ボードレールが『冥府』からの抜粋として発表する諸詩篇がそれほど社会主義的な性格を帯びていないこと、limbes の語が社会主義者は社会主義者でも、ブルードンではなくサン＝シモンの用語であることなどから、ヴァロンの見方がそれほど的確を射たものでないことが

<sup>6</sup> Jules Mouquet et W. T. Bandy, *Baudelaire en 1848*, Éditions Émile-Paul Frères, Paris, 1946, p. 84.

指摘されてきた。ところが、『冥府』がまずい詩集であったかどうかはともかく、1848年のボードレールの間人間関係や行動、ジャーナリズムとの関わりを追ってみると、詩集が社会主義的な詩集であり、ボードレールが政治的な立場からしてプルードンの弟子であったという点について言えば、1849年に下されたこの評価は、的外れであるどころか、きわめて妥当な見解であったことがわかる。

### 3. 1849-50年

年代記的に追って行った場合、従ってジャーナリズム的な文脈から見た場合もだが、1849年のボードレールの動静についてはほとんど何もわかっていない。書簡は二通しか残されておらず、しかも一通は宛先が不明であり、もう一通はディジョンで書かれたと推定されているに過ぎない。唯一の証言は、1849年2月5日の日付を持つドラクロワの日記のみである。この日、ボードレールがドラクロワのアトリエを訪れ、民衆とプルードンについて語ったらしい。ここにはさらにドーミエの名も見られること、ドラクロワがボードレールの意見を「このうえなく進歩的で近代的<sup>モデルズ</sup>」だと評していることなどから、民衆と革命についての話題であったと想像することは難くない。しかも相手は、1830年の革命について「民衆を導く自由の女神」を描いたあのドラクロワである。画家の証言を信じれば、1849年の2月までは、1848年の政治的興奮がまだボードレールの脳裏を占めていたのではないかと推測される。だが、結局この年については、刊行予定の詩集はおろか、詩の一篇も発表されなかったため、その足取りについては何もわからないというのが現状である。

ボードレールが次に公共圏に姿を現すのは1850年6月のことである。このとき、ボードレールは『家庭マガジン』に『冥府』からの抜粋として「驕慢の罰」、「まじめな人々の葡萄酒」の二篇を掲載する。この新聞は、娯乐的営利的な性格がきわめて強く、我々の文脈からすれば、きわめて重要な指標となるものである。というのも、既に見てきたように、1848年のボードレールは、基本的に政治的な姿勢に貫かれていた。詩の発表についても、『酒屋のこだま』紙に載ったらしい「殺人者の葡萄酒」があるだけで、いわば1848年のボードレールは詩人というよりも政治ジャーナリストと言った方がふさわしいほどであった。ところが、ここで非政治的な新聞に詩が掲載されたという事実は、何を意味するのだろうか。

この疑問に間接的にはあるが示唆を与えるのは、詩篇「驕慢の罰」である<sup>7</sup>。この詩は、13世紀のスコラ学者シモン・ド・トゥールネーの逸話に着想を得たものである。逸話によると、博士は修辞と博学を駆使し、神学上の困難な問題にも、見事な論証をもってたちどころに答えを与え、人々に信仰の意義を得心させることができたという。しかし、博士は自らの驕慢によって「イエズスよ、ちっぽけなイエズスよ！ 汝を随分高く押し上げてやったぞ！」だが、自分がその気になれば、イエズスに恥をかかせ、その栄光を失墜させることもできるのだ、と叫ぶやいなや、彼の理性は失われ、「往来の獣にも似た者とな」ったという。これは明らかに知識人の慢心に対す

<sup>7</sup> 「慢心の罰」の発想源となる逸話については、松村剛「ボードレール「驕慢の罰」補注」(『仏語仏文学研究』第4号、東京大学仏語仏文学研究会、1990)を参照。

る戒めという教訓<sup>モラリテ</sup>をもつものである。逸話だけでなく、実際に詩を読んでもそう受け取ることができる。この逸話をボードレールがどこから持ってきたかといえば、サン＝ルネ・タイヤンディエの「ドイツ無神論とフランス社会主義」という論文であるが、これは1848年に『両世界評論』に掲載されたものである。そして、そこで批判の対象となっているのは『経済的諸矛盾の体系』である、すなわち慢心の罰の槍玉にあげられているのはプルドンなのである。1848年において、ボードレールが社会主義とプルドンに傾倒していたことから考えてみると、ここには詩人の態度変更が示唆されてはいないだろうか。もちろん厳密なことは、詩とプルドンの著作、ならびにタイヤンディエの論文について、より仔細に検討してみなければわからない。つまり、この詩の内容をどの程度真に受けてよいのか、ということであるが、少なくとも詩に含意されているところは、それまでのボードレールと比べて政治的ないし思想的な立場としては曖昧なものになっていることが確認される。詩自体の含意は以上のようなものであるが、我々の文脈からすれば、なおいくらか問題が残る。すなわち、『家庭マガジン』の読者が果たしてそこまで考えて詩を読んだであろうかという問題である。答えはもちろん否である。『家庭マガジン』の主要な読者層であるブルジョワの子女が「ドイツ無神論と社会主義」などという論文に目を通していたと考えるのは無理がある。おかしいのはこれだけではない。「驕慢の罰」が収められているとする『冥府』は、「現代青年の憂鬱と動揺」を示すものと紹介されていたが、この主題もやはり掲載媒体の読者層とは不釣り合いであるように思われる。つまり、刊行予告が為された詩集も、載せられた詩も、掲載紙の性格を踏まえると、些か場違いであるとの印象を持たざるを得ないのである。

詩の内容と掲載紙の不均衡という、この問題は重要なものであるように思われる。というのも、ボードレールが1846年の段階で、既にそれなりの数の詩を書き上げていたという友人たちの証言からすれば、『家庭マガジン』によりふさわしい詩を選び取ることもじゅうぶんできたはずだからである。現に、掲載されたもう一方の詩篇である「まじめな人々の葡萄酒」は、遅くとも1846年には書かれていたものなのである。それでもなお、掲載紙の性格に合わない「驕慢の罰」を発表したという事実は、ボードレールなりに何らかの意図が働いていたことを物語っている。それはどのような意図だったかということについては、二通りの推測が成り立つ。まず、掲載紙と詩の間に何らかの関連性があるとする仮説である。言い換えれば、『家庭マガジン』にこの詩を発表する意味があったとするものだ。この視角から見れば、主知主義に対する批判は、ほとんど進歩思想への攻撃となる。この時代の知識人や有産者階級の人々に共通しているのは、社会の進歩という思想であり、これこそ、言論の象徴たる新聞、知識人、読者層であるブルジョワが拠って立つ共通の思想的地盤であった。1855年には、ボードレールはこの進歩思想を明確に批判する立場に立っているが、そうした反進歩主義の萌芽がここに読まれることとなる。

二つ目の仮説は、掲載紙云々に関わらず、「驕慢の罰」を発表する強い動機が詩人の側にあったというものである。この推測に従えば、「驕慢の罰」には、この時期におけるボードレールの問題意識が色濃く反映されているものと考えてよい。このとき、我々は詩で批判的となっているのがプルドンであると了解することができる。とすると、1849年の2月に見せていたブル

ードン礼賛、ならびにそれと不可分であった民衆崇拝からの脱却という主張が込められているものと考えてほぼ間違いなく、挑発的な雰囲気を持つ詩篇の内容とは裏腹に、冷静な批判意識が働いていることをここに認めることができるのである。

いずれの仮説に従うにせよ、「驕慢の罰」が『家庭マガジン』に掲載されたという事実、そしてその詩篇の内容は、1848年の革命の陶酔が既に醒めていることを証拠立てるものであり、知識人ブルードンから距離をとった——すなわち民衆崇拝から脱却した——ことが示唆されるといふ点できわめて意義深いものである。

#### 4. 1851年

続いて、1851年の3月には、反ボナパルティズムを掲げる戦論的政論新聞『議会通信』に、後の『人工天国』の前半部を成す「葡萄酒とハシッシュについて」が都合4回にわたって掲載される。これは、ボードレールの文学仲間シャンフルーリが深く関わっていた新聞であって、『酒屋のこだま』や『家庭マガジン』と比べて、——ベンヤミンが言うところの——編集部との交渉が深く為されたと考えられる点で注目に値する。その翌月には、『冥府』という総題の下、11篇の詩が掲載される。これは、『悪の華』に見られるような「憂愁 - 理想」の構造が明確に現れていること、一挙に11篇もの詩が掲載されたことから、ボードレールの詩学発展上きわめて重要な位置づけを持つ出来事である。

新聞の性格を念頭に置くならば、文学的な表現を通して政治や社会に関わる何らかの言及が為されていると考えるのは決して無理な想定であるとは言えない。『冥府』11篇の劈頭を飾る「Le Spleen」という詩篇を例に取ろう。これは、都市を浸潤し尽くす憂愁<sup>スプレイン</sup>と死を描き出した詩であるが、その冒頭は「雨月は都市の全体に腹を立て...」*« Pluviôse irrité cotre la ville entière »*という書き出しで始まる。ここに用いられている「雨月」Pluviôseという語は、フランス革命の際に作成され、1792年から1806年まで用いられた共和暦ないしは革命暦の冬の月の一つである。従来は、これが真冬の情景を導入することによって、死のイメージを強めるものであると分析されてきた。それはもちろんであるが、ここでわざわざ革命暦が持ち出されたことの意味それ自体が問われたことはこれまでなかった。たとえば、この詩篇を『悪の華』に置いてみた場合、まずその詩学的ないしは美学的な意味を問うことは至当である。けれども、これが反ボナパルティズムの政論新聞『議会通信』という媒体に載っている場合はどうであろう。この新聞の読者が政治的な文脈を全く抜きにしてこの詩を読んだと言い切れるものであろうか。少なくとも、そのような文脈上で読まれる可能性は十分にあったであろうし、またボードレール自身もそのことに無自覚であったとは思えない。

このような方向での可読可能性<sup>アンテリジビリティ</sup>は、続く二行目においてさらに強められるように思われる。それは「その甕から滔々と冥い冷気を注ぐ」*« De son urne verse à grands flots un froid ténébreux »*という一節であるが、ここで「甕」と訳した *urne* という語は、実は「投票箱」という意味を持っているのである。Littré et Beaujeanの辞典によれば、「近代人の間では、票を集める箱の意。投票箱 *L'urne électorale*」とある。純粋に「甕」という意味を持つ語であれば、他にも *jarre, cruche, broc, vase*

などの語がある。無論、これらの語に「投票箱」という意味はない。1851年というタイミングにおいて「投票箱」と言った場合、そこには普通選挙制をめぐる議会とルイ・ボナパルトとの対立がほぼ必然的に想起される。さらに、urneの語に投票箱の意味を読みこむことは、『議会通信』の『冥府』に付された注を考慮すると、より正当なものであるように思われる。そこには、「この詩集は現代「青年」の精神的動揺の歴史を跡づけるべく書かれたものである」«*qui est designé à retracer l'histoire des agitations spirituelles de la Jeunesse moderne*»との文言が読まれる。そもそもこの注自体も、これまで正面切って取り上げられたことはほとんどなく、刊行予定の詩集の紹介という程度にしか理解されてこなかったが、この注を素直に読むならば、掲載された11篇の詩について、そこに現代的な意味を読みとるべしとの指示だと理解できるものである。

以上のような解釈に従えば、掲載新聞、編集部注、選ばれた語の間に一貫性を見出すことができる。Pluviôseの出所である共和暦は、ナポレオン一世が第一共和政を廃し、帝政を宣言すると共に廃止されたわけだが、ボードレールがこの詩を発表したのは、再び共和政が廃止され、帝政が樹立されるか否かという瀬戸際の状況においてであり、そうした共和政の危機の再来をもたらすものが新たなるナポレオンと普通選挙制であった。このような19世紀の初頭と半ばに、ほとんど引き写しのようにして現われた歴史的な類<sup>アナロジー</sup>比を、革命暦「雨月」と「甕=投票箱」という二つの語は驚くほどの確に捉えている。

このような解釈を正当化するのは、言うまでもなく掲載媒体の性格であり、作品の最初の受け手たる読者がそれをどのように読み得たかという可<sup>アンテリジビリティ</sup>読可能性の観点である。そして、そこから得られた詩の解釈は、確かにこの時期にボードレールが抱いていた問題意識と一貫性を示している。

## 結論

『家庭マガジン』において、ボードレールが民衆崇拜からの脱却ないしは反進歩思想の萌芽を示していたことは既に見たとおりだが、『議会通信』への掲載という事実、そしてそこに読まれる詩の内容を勘案するならば、1851年時点でボードレールが政治的な言論とすっぱりと切っていたとは言い難いようにも思われる。このあたりの曲折をどのように考えればよいだろうか。

少し視野を広げてみるならば、この時期のボードレールの立場がどれほど曖昧なものであったかがわかる。時期によって様々な偏差はあるものの、ボードレールのジャーナリストとしての活動は、全体的に見て以下ようになる。1841年に初めて公論の場に姿を現してから1847年まで、ボードレールは詩を始めとする芸術に強い関心を抱いており、この時期に発表されたものは美術や文学に関するものに限られていた。1848年に、ボードレールは『公共福祉』などを通じて政論のようなものを書いたが、そうした政治的な言論活動はあくまでもこの年に限られる。

確かに、1849年以降もある程度政治的な方向性を持つ新聞に詩や芸術論を発表することはあったし、詩の内容も——特に1850年代後半から60年代にかけて発表された散文詩については——政治的な示唆を含むものが少なくない。より明示的に政治的な意見を読みとることのできる文章も残しているが、それらが生前に刊行されることはなかった。だが結局のところ、1849年以降、ボードレールがジャーナリストとして政治的な言論に手を染めることはもはやなかったの

である。ということは、政治的な言論にのめり込んだ1848年だけがむしろ例外的なものであり、それ以外の時期についていえば、表向きの主題は文学と芸術に限られたものであった。しかしながら、1848年以降も政治的な意識は執拗に生き続けた。残された草稿にはそうした意見表明が見られるし、実際に発表された作品にもそのような問題意識が所々顔を出している。

ここで焦点を当てた1848年から1851年というのは、芸術への志向を持っていた青年ボードレールが政治的な言論に入り込み、そこから再び詩人として芸術志向的な言論へと立ち戻ってくる時期だと言える。1848年2月の『酒屋のこだま』との関わり、1850年の『家庭マガジン』および1851年の『議会通信』を検討するならば、この間の時期にボードレールはおそらく何らかの反省を強いられたのではないかとの推測が成り立つ。

そもそもこのような解釈を可能にするのは、言論の場という基底的な条件である。言論の場とは、特定の性格を持った発表媒体、その受け手にとっての可読可能性<sup>アンテリジビリティ</sup>、作品が媒体に発表された時期にその製作者たるボードレールが抱えていた問題意識という三つの項によって規定されるものである。こうした構成要素を、何らかの言論媒体に掲載された特定の作品に即して理解していくとき、理論的な観点からは、最初の受け手という理念を放棄することなく、ヤウスの解釈学における受容史の再構成が可能になる。また、文学解釈の実践において、これまで見落とされてきた意味を再び見出すことが可能になるのである。

(ささき みのる／名古屋大学大学院博士課程後期課程フランス文学第一研究室)